

陳述副詞「よも」をめぐって

— 平安時代仮名文学作品を中心に —

森脇 茂秀

一、はじめに

源氏物語に次のような一節がある。(以下、傍線は稿者)

「用例1」心ひとつに思ひまうけて、守こそおろかに思ひなすとも、我は命を譲りてかしづきて、さま容貌のめでたきを見つきなば、さりとも、おろかになどはよも思ふ人あらじと思ひたちて、八月ばかりと契りて、調度をまうけ、はかなき遊び物をせさせても、さまことにやうをかしう、蒔絵螺鈿のこまやかなる心ばへまさりて見ゆる物をば、この御方にととり隠して、劣りのを、「これなむよき」とて見すれば、守はよくしも見知らず、そこはかとなき物どもの人の調度といふかぎりはただとり集めて並べ据ゑつつ、目をはつかにさし出づばかりにて。

(「源氏物語」六 東屋 14頁)

この場面は、浮舟への求婚者の中から如何にして伴侶を選ぶか、母中将の君の心の動きを表している。その中で左近少将を選ぶのであるが、母中将の君が娘の将来を思う心理表現のなかに「よも思ふ人あらじ」とある。こゝは、「浮舟の姿顔貌の美しさを見たら、まさかいいかげんになどはよもや思う人はいるまい」と解釈できると考えられるが、この場面では、所謂陳述副詞「よも」が用いられており、「対象や他者の上の状況に対する判断」を表していると考えられるが、更にそれに先行する形で「さりとも」が存しているのである。

稿者は、ここに表出した「さりとも」を、「さり」ととの関係に於いて考察したことがあり(森脇(二〇〇二))、そこでは、次のような結論を得た。

・「さり」として「さりとも」は、接続詞的用法（逆接仮定表現）「さり・とて」「さり・とも」から、副詞的用法（「まいったく」「なんとかして」「等の副詞句化）「さり」として「さりとも」へ、と変容した結果、衰退した。

・「さり」として「は」と複合した「さり」としては「形となり、文語的な場面で〈逆接仮定表現〉として用いられた。

・「さりとも」「は心話文に用いられ、「さりとも」・「否定（じ）」「形」「さりとも」・「推量」形から「さりとも（後件省略）と」形へと変容した。

この中で、特に、「さりとも」は心話文に用いられ、「さりとも」・「否定（じ）」「形」「さりとも」・「推量」形から「さりとも（後件省略）と」形へと変容した」という点は、この用例が心話文であること、また助動詞「じ」との呼応関係からしても、副詞「よも」との共通性が高いと考えられ、この用例においても、「さりとも」「よも」両者が、偶然に表れた訳ではない、と考えられる。

そこで、本稿においては、平安時代の文学作品を中心に、陳述副詞「よも」の呼応する語形を考察することで、

その意味用法を考察してみようと思う。

二、先行説と用例数概観

「よも」について、まず、『日本国語大辞典 第二版』には、次のように「よも」の意味について指摘している（用例は省略）。

確定的ではないが、そのようなことはまさかあるまいという予測を表す語。まさか。よもや。（イ）（打消推量の助動詞「じ」「まじ」などを伴って）万が一にも……ないだろう。（ロ）（打消の語を伴わず、反語的に）まさかそのようなことがあるだろうか、ないであろう。

また、『日本語文法大辞典』（明治書院 二〇〇一）には、

ほとんど実現性のない状態を表す。否定の推量表現

（「じ」など）と呼応する。まさか。よもや。

と意味を規定し、「語誌」の欄で次のように指摘している。

語源は不明。『万葉集』には見られない。『竹取物語』『宇

津保物語』『落窪物語』『和泉式部日記』などに用いら

れ、八代集では『後拾遺集』以後に見られる。平安時代

では、かなり広く用いられたと思われる。主として会話

文・心話文に用いられる。否定表現と呼応しない反語表

現の「よも」の用例が謡曲などに見られる。陳述副詞の

呼応というものは、この語に限らず、かなり揺れるもの

である。江戸時代になると、係助詞「や」を伴って「よ

もや」の形が現れ、否定表現「じ」と呼応して「まさか」

ここで、「よも」の用例数を表にして示すと次のよう
になる。(表I)

<表I>

作品名	成立年代	用例数
万葉集	(759)	0
東大寺願講文稿	(830?)	0
竹取物語	(859?)	1
古今和歌集	(905)	0
延喜式祝詞	(905-927)	0
伊勢物語	(900?)	0
土左日記	(935)	0
後撰和歌集	(951)	0
大和物語	(956)	0
蜻蛉日記	(974)	1
宇津保物語	(983?)	8
三宝絵詞	(984)	0
落窪物語	(988)	15
拾遺和歌集	(1000)	0
枕草子	(1002)	4
和泉式部日記	(1004)	4
源氏物語	(1008)	24
紫式部日記	(1008)	0
堤中納言物語	(1005)	2
更級日記	(1060)	0
栄花物語	(1060)	5
大鏡	(1086)	3
夜の寝覚	11世紀後半?	17
法華百座聞書抄	(1110)	0
古本説話集	(1126~1201)	2
佛教説話集	(1140)	0
詞歌和歌集	(1151)	0
梁塵秘抄	(1169)	0
三教指帰注	院政後期	0
宝物集	(1178)	1
千載和歌集	(1188)	2
宇治拾遺物語	(1210頃)	15
方丈記	(1212)	0
保元物語	(1221)	15
平治物語	(1221?)	14
延慶本平家物語	(1309)	70
徒然草	(1330頃)	3
遊仙履	(1344)	0
湯山聯句抄	(1504)	0
中羅若木詩抄	(1534?)	0
天草版平家物語	(1592)	15
天草版伊曾保物語	(1593)	1
天正狂言本	(1578?)	0
大蔵虎明本狂言集	(1642)	3
きのふはけふの物語	(1624)笑話	0
計		225

平安時代の文学作品に表れた「よも」の語数は、決して
多い方ではないが、複数の作品に散見されることから、
『日本語文法大辞典』に指摘された如く、恐らく「平安
時代では、かなり広く用いられた」語形ではないかと考
えられる。

右のような、所謂辞書、辞典の記述は、紙面の制約も
あり、また時代的変遷過程を大きな視点で捉えるという
前提での記述であろうから、呼応する打消推量の助動詞

は、「打消推量の助動詞「じ」「まじ」などを伴って」であるとか、「陳述副詞の呼応というものは、この語に限らず、かなり揺れるものである」といった指摘となったのかもしれないが、いずれにしても、平安時代における「よも」との呼応語形について、後世「かなり揺れる」以前に如何なる姿を示すのか、各作品毎に明らかにする必要があると考えられる。

また、「よも」の解釈に対して、「用例1」では、「さりとて」には「まさか」、「よも」には「よもや」と対応させたが、これら、現代語の「まさか」、「よもや」に関して、森田良行『基礎日本語辞典』には、「まさか」との関連で「よもや」を次のように指摘する（用例は省略し、纏めて示す）。^(注1)

（「よもや」は「まさか」と似て、後に打ち消しを伴い、皆無とは言い切れないにしても、まず実現性のないという判断の気持ちを表す。「よもや先生のご恩を忘れたり
は致しません」のように「絶対に」という強めのことばとして用いられることもある。この場合には本人の意志

的な行為にも用いられるが、その他の例では対象や他者の上の状況に対する判断に用い、「まさか」と異なつて、自身の意志的行為には用いない。

この指摘は、古代語の陳述副詞「よも」を考察する上で、極めて示唆的である。

一方、時代は遡るが、「よも」の意味用法について、次のような分析がキリシタン資料に存する。

・ Yomo. ヨモ (よも) 否定動詞「否定形」を伴つて、
“決して…しない”という意となる。例、よもあらじ
(Yomoaraji:) …であるはずはなからう、または、…が
あるはずはなからう。 (『日葡辞書』827頁)

YOMO (よも)

○この副詞は、決してないとか、兎も角もとかといふ意を示し、又時には、ないやうに思はれるとか多分ないだらうといふやうな、疑はしいが多分ないだらうとい

ふ意を示す。さうして常に未来の否定の語を伴ふ。又この副詞の支配する動詞に対して前置される。例へば、(よも) (Yomo) さうはいぢるまい。(よも) (Yomo) 舟出まいと存じたれば、さては出たよ。(よもよも (Yomoyomo) 参るまい)、など。(略)

○附則一

○この副詞の支配する否定動詞は省略されてゐることが屢々ある。さうしてそれは「都 (Miyaco)」に於いて多く用ゐられる言ひ方である。例へば、(よもよも (Yomoyomo) と存じたれば、お死にあつたよ。)(よも (Yomo) お死にあるまいと存じたれば、お死にあつたよ。)(の意。(よもよも (Yomoyomo) と申したれば、お参りあつた。)(即ち、(よも (yomo) お参りあるまいと申したれば、お参りあつた。)(の意。

○附則二

○この副詞に支配される動詞は往々肯定動詞であるが、然しその意味は否定である。例へば、(金のよい太刀を

持つてござれば、官人共安穩には一人もよも (yomo) 返しまらせうぞ。」「平家」巻二、二章(この川の深さ浅さも利根川に如何程の劣りがよも (yomo) いぢらうぞ。)(同前。(ロドリゲス「日本大文典」430、431頁)

「日葡辞書」に示された用例は、「よもあらじ」であり、「天草版伊曾保物語」中の「よも」の用例は、「さだめて…よも…じ」形となっており、「よも」は「じ」と呼んでいる用例のみである。(注2)

しかし、「日本大文典」では、「じ」以外にも、「まい」や、否定語を伴わない肯定形をも採録しており、これは、現代語の「よもや」と共通しているが、更に、「よも」の後続句である否定語が省略されることがしばしばあること、そしてそれは「都」(Miyaco)に多い用法である等、中世後期の「よも」の意味用法を考察する上で重要な指摘がある。

以下、本稿においては、平安時代初期、中期、後期に分け、平安時代における陳述副詞「よも」の意味用法を考察していくこととする。

三、平安時代文学作品中の「よも」

三一、平安時代初期の「よも」

〔用例2〕これを聞きてかぐや姫は、「さしこめて、守り戦ふべきしたくみをしたりと、あの国の人を、え戦はぬなり。弓矢して射られじ。かくさしこめてありとも、かの国の人來ば、みな開きなむとす。あひ戦はんとすとも、かの国の人來なば、猛き心つかふ人も、よもあらじ」。翁の言ふやう、「御迎へに來む人をば、長き爪して、まなこをつかみつぶさん。さが髪をとりて、かなぐり落とさむ。さが尻をかき出で、こゝらの公人に見せて、恥を見せん」と腹立ちをる。
(「竹取物語」62頁)

〔用例3〕さるうちにも、今やけふやとまたるゝ命、やうく月たちて日もゆけば、さればよ、よも死なじものを、さいはひある人こそ、命はつゞむれとおもふに、うべもなく九月もたちぬ。

廿七八日のほどに、土犯すとて、ほかなる夜しも、めづらしきことありけるを、人つげにきたるも、なにごと

もおぼえねば、うとくてやみぬ。

(「蜻蛉日記」下「絵をかく」285頁)

(『大系』・339頁(『全集』))

〔用例4〕かくて、おとゞ「男は遊びし、女子は物の音かきならして聞し召させ給はん」とて「舞には御子たちの御子ども、左大辨、兵衛の督、中将などの御子ども出さるなりや。左大辨、中将などの御子たちはうしろめたうはあらじ。女子たちも恥かしげにはよもあらじかし。みやあこ、いへあこなどをば、例の師にはあらで、仲頼、行正らして、この手ども習はせん。舞をば、この人ぐ習はさざらん。まだせぬ事なめれば、さはありとも、の給へなんかし」とおもほして、人ぐ召しに遣はして、人もなき簾のうちに召し入れて、(略)

(「宇津保物語」二 333頁)

〔用例5〕見給ヒて、御返「宮の御事は悪しきやうにいひ騒ぐなりしかば、いとゞ昔の人の物し給はぬをなんあはれに心細く思ウ給へし。今も心ゆるびなく恐しき世なれば、御宮仕などし給ヒて後見聞え給はば、頼しうなん。民部卿殿に聞ゆる事有りしや。聞き給ヒけん。なホサ思

し立夕ば、よもうしろめたうは」と聞え給フ。

(「宇津保物語」三 310頁)

〔用例6〕(略) 女御の君「あなかまや、夜昼御前に候はれければ、うち休まんとこそは。何かは御髪のわたりも、何も人の見奉り給はんに、よもこそともかくもし給はメ、さらに」との給フ。
(「宇津保物語」二 382頁)

〔用例2〕は、「竹取物語」の用例で、かぐや姫が迎えに来る月からの使者と争つても無駄であると翁に説明している会話文に「よも」が用いられている。『新日本古典文学大系』脚注には「勇猛な心を發揮する人も万一にもいないでしょう。「よも」は下に打消し推量を伴い、まさかないだろうという否定的予測を表す副詞」とあり、この用例は確かに、「〈否定的予測〉を表す副詞」であると考えられる。

〔用例3〕は、「蜻蛉日記」の用例で、道綱母が亡くなった後、思い出として振り返るよすがとして絵を描き、亡くなる日を覚悟はしているが、そうはいうものの「きはめてさいはひなかりける身」であるから「よもや死には

しないだろうに」と述べている場面であり、「〈否定的予測〉を表す副詞」用法ではないと考えられる。ここでは、作者道綱母自身のことであり、また「じ」で文が終止せず、助辞「ものを」が後接している点、「用例2」とは異なっている。(注3)

〔用例4〕は、「中将などの御子達は心配しなくても立派に舞をまうだろう。女子達もこちらがきまりの悪い思いをするような下手の弾き方はよもやすまい」と解される用例で、「よもあらかじかし」となっている。「用例2」「よもあらかじ」に助辞「かし」が承接した用例であるが、「よも」修飾句が省略され、「かし」と直接承接した「よもかし」形は、後世、近世期に用いられることになる。

〔用例5〕は、「あなたがそのように思立って下されば、決して後ろめたい思いはおさせしませんから」(『大系』)と解される用例で、「よもうしろめたうは」で終止し、後件句が省略され、それを「と」で承ける形である。これは、「よも」と「と」が直接承接せず、「うしろめたうは」が存しているが、述部が省略していることは明らかで、「この副詞(「よも」)の支配する否定動詞は省略さ

れてゐることが屢々ある」(ロドリゲス「日本大文典」○附則一)と指摘されている用法と同質のものであると考へられる。

〔用例6〕は、『大系』本文では「給はメ。」とここで文が終止する、と考へているが、そうするとこの用例では、「こそ」の結びも「め」と係り結びが成立し、省略された述部を想定できない。したがつて、この用例は、「よも」と共起する否定語がない、ということになるが、所謂「結びの流れ」と解すれば、後続の「更に」の後には、否定語が想定でき、ここでは「よもこそともかくもし給はメ、更に」(「と省略語を想定できるのではないか。」「この副詞に支配される動詞は往々肯定動詞であるが、然しその意味は否定である」(ロドリゲス「日本大文典」○附則二)と指摘されている用法は、後述するが、平安時代には見受けられないのである。

三一、平安時代中期の「よも」

「落窪物語」には、「よも」の用例が比較的纏まつた形で散見される。以下、用例に則してコメントする。

〔用例7〕四の君の御返り、「年比は杉のしるしもなきやうにて尋ね聞えさすべき方なくなむ思ひ給ふるに、いともくうれしくてなむ。『人はよも』』とは、心うくもおしはからせ給ひけるかな。

うちすてて別れし人をそことだに知らでまどひし恋はまされり」

と聞え給へり。

(「落窪物語」卷之三 194頁・310頁)

〔用例8〕あこぎ典薬に、「ぬしをこそ今は頼み聞えめ。御焼石もとめて奉り給へ。皆人も寝静まりて、あこぎがいはんに、よもとらせじ。これにてこそ心ざしありなし見えはじめ給はめ」といへば、(略)

(「落窪物語」卷之二 112頁・184頁)

〔用例9〕「(略)」と少将に申し給へば、ほゝゑみ給ひて、

「これもよも忘れ侍らじ。又もゆかしう侍り」と申し給へば、「いかでか。けしからず。更に思ひ聞ゆまじき御心なめり」と笑ひ給ふ。

〔落窪物語〕 卷之二 128頁・208頁

〔用例10〕 女君、「何事ぞ」。「右の大い殿の事なりけりな」との給へば、女、「そらごと」とて、ほゝゑみてる給へれば、「物狂ほし。みかどの御娘給ふとも、よも得侍らじ。始めも聞えしを、たゞつらしと思はれ聞えじとなん思へば、女の思ふ事は、また人まうくる事こそ歎くなれと聞きしかば、そのすぢは絶えにたり。人々とかう聞ゆとも、よもあらじと思せ」との給へば、「さ思はんもしたくづれたるにや」といへば、「おもひ聞ゆと聞えばこそ、あやふしとの給はめ。たゞつらきめ見せ奉らじと聞ゆれば、心ざしのありかは」など聞え給ふ。

〔落窪物語〕 卷之二 157頁・252頁

〔用例7〕 は会話文中の用例で、当該箇所「人はよも」については、「人はよも」「人はよに」等、底本に揺れがあるのであるが、これを、ロドリゲス『日本大文典』

「この副詞の支配する否定動詞は省略されてゐることが屢々ある」(○附則一)とする用法であると捉えると、「よも」後接句全て省略されたことになり、「宇津保物語」の後接句部分省略形よりも、更に省略箇所が多い用例であるとも考えられよう。

〔用例8〕 は、会話文中の用例で、『大系』頭注には、「私」がたのむ場合には、決して私にわたしてくれないでしよう」とあり、あこぎが頼んだところで、とてもお邸の者は温石を整えてくれますまい、と解せるのであるが、ここで「とらす」は動作性動作を表しており、「よも」は「ほとんど実現性のない状態を表す」というよりも、「まず実現性のないという判断の気持ちを表す」と考えた方が適切である、と思われる。

〔用例9〕 『大系』頭注には、「この女君〔落窪〕も決して忘れませまい。」とある。後続の「でも他にも女が欲しゅうございます」より、『全集』頭注には、「少将の計略があつて述べる冗談であるが、色好みの心理をうがった言葉でもある」と指摘する。ここでは動作性動詞「忘る」に「侍り」が下接していること、また、会話文中の用例である

ことを指摘しておきたい。

〔用例10〕は、近接する場面に「よも」が2例、会話文中に用いられている。後件句が省略された1例を除き、後の状態性用言「よもあらじ」形は、「落窪物語」中で3例であるのに対して、その他の「よも」と呼応する述部動詞の用例は、「し給ふ」「おはす」「まいらす」「とらす」「まうでく」「笑ふ」「死に給ふ」「思ふ」「得侍り」等、動作性動詞である。しかも全て助動詞「じ」と共起している点、安定した用法と捉えることができよう。

次に、「枕草子」について。「枕草子」中、「よも」は4例用例が存する。（「三卷本」本文と「能因本」本文の一致した例のみ。『新校本枕草子』等を参照した。）

〔用例11〕右衛門の佐宣孝といひける人は、「あぢきなきことなり。たゞきよき衣を着てまうでんに、なでふことかあらん。かならず、よも、あやしうてまうでよと、御嶽さらのたまはじ」とて、三月、むらさきのいと濃き指貫、しろき襖、山吹のいみじうおどろおどろしきなど着て、隆光が主殿の助には、青色の襖、くれなるの衣、

すりもどろかしたる水干といふ袴を着せて、うちつづきまうでたりけるを、(略)

(「枕草子」一一五段 171頁)

〔用例12〕右近の内侍のまるりたるに、「かかる者をなん語らひつけておきためる。すかして、つねに来ること」とて、ありしやうなど、小兵衛といふ人にまねばせて聞かせさせ給へば、「かれいかで見侍らん。かならず見せさせ給へ。御得意なり。さらに、よも語らひとらじ」などわらふ。

(「枕草子」八三段 128頁)

〔用例11〕は、引用句中の用例で、「御嶽権現は、かならず粗末な服装で参詣せよなどと絶対におっしゃらないであらう」と解釈されるが、ここでは「よも」が修飾する語句は、引用節を承けた「のたまはじ」であることに着目したい。現代語「まさか」や「よもや」には、「まさか……とは思うまい」のように、引用節と承接した述部と呼応する用法があり、そのような用法と捉えることが可能であらう。また、「よも」後接部に「さらに」がある形式は、「宇津保物語」〔用例6〕と同じである。

〔用例12〕も引用句中の用例で、右近の内侍が中宮に「私は決しておなじみの人を好きになつて奪つたりいたしませんから」と解釈できる。ここでも「かならず」が先行しているが、「さらに」が「よも」に前置され「さらに、よも……じ」形となつている点、〔用例11〕と異なる。また、この用例は現代語「よもや」の「絶対」に“という強めのことばとして用いられることもある。この場合には当人の意志的な行為にも用いられる」（『基礎日本語辞典』）用法と考えられよう。また、〔用例11〕〔用例12〕共、「よも」は、副詞句「かならず」や「さらに」と共起し、現状と比較して「否定的予測」を表す副詞「用法ではない。」

〔和泉式部日記〕中の「よも」も、全て引用句中に用いられている。

〔用例13〕 昼つかた、川の水まさりたりとて人々見る。宮も御覧じて「たゞ今いかゞ。水見になんいきはべる、おほ水の岸つきたるにくらぶれどふかき心はわれぞまされる、さは知りたまへりや」とあり。御返、今はよもきしもせじかしおほ水のふかき心は川と見せつゝ、かひな

くなん」と聞えさせたり。

（『和泉式部日記』407頁・97頁）

〔用例14〕（略）「なほいとくるしうこそ。いかにもありて御覧せさせまほしうこそ」と聞えさせたれば、（宮）うたがはじなほうらみじとおもふとも心に心かなはざりけり、御かへり、（女）うらむらむ心はたゆなかりなくたのむ君をぞわれもうたがふ、と聞えてあるほどに、暮れぬればおはしましたり。宮「なほ人の言ふことあれば、よもとは思ひながら聞えしに、かゝる事言はれじとおぼさば、いざ給へかし」などの給はせて、明けぬれば出でさせ給ひぬ。

（『和泉式部日記』435頁・135頁）

〔用例13〕は、和歌に用いられた用例で、歌語として「よも」が用いられており、語性を考察する上で注目されるが、ここでは「今はまさかおいでになりますまい。深い心を大水の川でそれとお示しになるというけれど」と解すことができよう。この用例も〔用例4〕と同じく、「よも……じかし」形であり、「かし」と共起することで「判

断の気持ち」を表出していると考えられるが、ここでは、「否定的予測」を表す副詞「用法である。

「用例14」は、会話文中の用例で「やはり人があなたのことをあれこれ噂しますので、まさかとは思うもののお便りしたのでしたが」と解される。ここでは、「よも」後件句部分が省略されており、「用例5」「用例7」と同様であるが、これは「否定的予測」を表す副詞「用法ではない、と考えられる。

次に、「源氏物語」について。「源氏物語」中には「よも」の用例が24例見られるが、述部が、省略された形1例を除き、述部は、全て助動詞「じ」を伴っており、統一的に用いられた用法であることが窺える。以下、用例を示す。

「用例15」権中納言も、かかることどもを聞きたまふに、人づてにもあらず、さばかりおもむけさせたまへりし御気色を見たてまつりてしかば、おのづから便りにつけて、漏らし聞こしめさすることもあらば、よももて離れてはあらしかしの心ときめきもしつべけれど、女君の、今は

とうちとけて頼みたまへるを、(略)

「源氏物語」(四) 濔標32頁
「用例16」例の、抱きたまふ。(匂宮)「いみじく思すめる人はかうはよもあらしよ。見知りたまひたりや」とのたまへば、げに、と思ひて、うなづきてゐたる、いとらうたげなり。
〔源氏物語〕(六) 浮舟147頁

「用例17」きよげなる童などあまた出でて来て、閑伽奉り、花折りなどするもあらはに見ゆ。(供人)「かしこに女こそありけれ」僧都は、よもさやうにはすゑたまはじを(供人)「いかなる人ならむ」と口々言ふ。下りてのぞくもあり。(供人)「をかしげなる女子ども、若き人、童べなん見ゆる」と言ふ。(源氏物語)(二) 若紫275頁
「用例18」さすがに、人の言ふことは強うもいなびぬ御心にて、(姫君)「答へきこえて、ただ聞けとあらば、格子など鎖してはありなむ」とのたまふ。(命婦)「簀子などは便なうはべりなむ。おしたちて、あはあはしき御心などは、よも」など、いとよく言ひなして、二間の際なる障子、手づからいと強く鎖して、御褥うち置きききつくるふ。
〔源氏物語〕(二) 若紫355頁

〔用例19〕（源氏）「必ずその日違へずまかり着け」とのたまへば、五日に行き着きぬ。思しやることも、あり難うめでたきさまにて、まめまめしき御とぶらひもあり。（源氏）「海松や時ぞともなきかげにゐて何のあやめもいかにわくらむ 心のあくがるるまでなむ。なほかくてはえ過ぐすまじきを、思ひ立ちたまひね。さりともうしろめたきことは、よも」と書いたまへり。

（源氏物語）（二） 濔標284頁

〔用例20〕 思しまどひたるさま心苦しければ、「身のほど知らずなめげには、よも御覽ぜられじ。たゞ一声を」と言ひもやらず、涙のこぼるゝさまぞ、さまよき人もなかりける。（堤中納言物語） 逢坂越えぬ権中納言

395頁・473頁

〔用例15〕は、権中納言（夕霧）が「よもや婿の候補者から除かれるということにはなるまい」という心中を表す引用句中の用例で、〔用例4〕〔用例13〕のように「じ」と「かし」が承接している用例である。また、ここでは「否定的予測」を表す用法ではない。

〔用例16〕は、匂宮が「あなたがたいせつに思っていていらっしやるであろう薫は、よもや舟上で抱き続けるようなことはしないでしょうね。」と浮舟に話しかけている場面であるが、〔用例15〕「じかし」同様、ここでは「じよ」と文末に助辞が共起しており、匂宮の心情（判断）が一層表出していると考えられる。

〔用例17〕は、供人が「僧都は、まさかあのように女をお囲いにはなるまいに」と話す場面に用いられたもので、「よも」と呼応する述部「じ」に「を」が承接している例である。『全集』頭注には、「よも」はまさか。下に、打消の語を伴う。「を」は逆接的な詠嘆の間投助詞」とあるが、「まず実現性のないという判断の気持ちを表す」〈心情〉を助辞と共起することによって表現する「じかし」形と同質のものであると考えられる。

〔用例18〕は、「よも」の後件句が省略された用法で、「よも」を助辞「など」が承けて「よもなど」形となっている用例である。『全集』頭注に「よも」の下に「あるまじ」などの語を補って読む。」とある指摘は、ここまで考察した結果で明らかのように、平安時代中期まで後件

句に「まじ」を伴った用例は見られず、補うとすれば「あらじ」形が適切であろう。

「用例19」は、やはり引用句中の用例で、「用例1」同様「さりとも」と「よも」と共起した例である。「よも」後接句が省略されており、「用例5」「よもうしろめたうは」ととの共通性を見出し得る。『全集』頭注には「「よも」の下に、させまい、ぐらいを補つて解す。」とあり、「心配なことは決してさせません」等、「当人の意志的な行為」を表していると考えられる。

「用例20」は、「身の分際をわきまえず、無礼な振舞いなどは決していたしません。」と解される「堤中納言物語」の用例である。ここでは、「用例19」のように「意志的な行為」を表す用法であり、「〈否定的予測〉を表す副詞」用法ではない、と考えられる。

以上のように、中期までの「よも」は、被修飾句が省略された用法が存し、また、表出した被修飾句には「じ」と共起した用法のみであることが明らかとなった。

三一三、平安時代後期の「よも」

さらに、平安時代後期の「よも」の用例について考えてみたい。まず、「栄花物語」において、「よも」は、5例用いられているが、「じ」と呼応するものが4例、修飾される述部が省略された、「よもと」形が1例、用例が存する。

「用例21」かゝる程に、花山院この四君の御許に御文など奉り給、けしきだゝせ給けれど、けしからぬ事とてきゝ入れ給はざりければ、たびく御みづからおはしましつゝ、今めかしうもてなさせ給ひける事を、内大臣殿は、「よも四君にはあらじ、この三君の事ならん」と推し量りおぼいて、わが御はらからの中納言(隆家)に、「この事こそ安からず覚ゆれ。如何すべき」と聞え給へば、(略) (『栄花物語』 巻第四 156頁)

「用例22」さるべき人々皆御迎へにかぞへたてゝせ給ふ。殿の御心様あさましきまで有り難くおはしますを、世に目出度事に申べし。」帥殿も、我御心のいかなれば

にか、「いと思はず成ける殿の御心かな。女御（彰子）参り給て後は、よもとこそ思ひ聞えつるに、一宮の御迎への有様などぞ、誠に有り難かりける御心なりけり。我らはしもえかくはあらじかし」とぞ、内々には聞え給ける。
（「栄花物語」 卷第六 205頁）

〔用例21〕は、内大臣殿の心話文で、「美人ということも聞かない四の君の許によもや院が通われることはあるまい」と「推し量りおぼいて」「聞え給」ふ場面である。ここでは、「よも・・・じ」形で、平安時代中期までの用法と同質のものである。

〔用例22〕は、「よも」述部が省略され、「と」と承接した用例で、「よもや中宮にこれほどの好意を寄せてくれようとは思ひもかけなかつたのに。」と解釈される用例である。

〔用例23〕「(略)世中の人、「女御殿、(在後拾遺抄第十七)雲るまでたちのぼるべきけぶりかとみえしおもひのほかにもあるかな」といふうたよみ給へり」など申こ

そ、さらによもとおぼゆれ。いとさばかりの事に、和歌のすぢおぼしよらじかしな。御心のうちにはをのづからのちにもおぼえさせ給やうもありけめど、人のきつたふるばかりはいかゞ有けん」といへば、(略)

〔用例24〕まれくまいりよる人ぐは、よにきこゆることゝて、「(略)」などのみ申すを、まことにしもあらざらめど、げにことこのさまもよもとおぼゆまじければにや、きかせ給御心ちはいとゞうきたるやうにおぼしめされて、「ひたぶるにとられんよりは、われとやのきなまし」とおぼしめすに (略)

〔用例25〕さすがにゆかしければ、対の御方、端ちかくいざり出たるに、よりおはしてげにいかにあやしく思さるらむ。まろも夢とぞおぼゆる。石山の御つたへをひきたがへ、弁少将にさだまり給ふるうらめしさに、ゆくなりなく思ひよりぬるを、さりとも、よも守にはいはせじ。いつまでかことゝには」と、この人にも中将と思はせてのたまふに、(略) (「夜の寝覚」卷一 58頁)

〔用例26〕「げに、心とあることにはよも侍らじを、ねんごろに心をつくして、聞えをかす人のあればこそあらめ」と推しはかるに、(略) (『夜の寝覚』巻二 152頁)

〔用例23〕は、「こそさらによもとおぼゆれ」形で、『大系』頭注には、「まさかどうしてそんな事が・・・と思われるます」、『全集』頭注には、「さらに」は、あとに「よも(あらじ)」の語を伴って、けっして、ぜんぜん、の意。

いやまさかそんな詠歌のことなどはとは思われまますよ。」と指摘する。確かに「よも」は、「かならず」や「さらに」といった副詞句と共に起する用例が見受けられ、文末に「推量形式」と呼応するという面で共通性を有する。

〔用例24〕は、いわば、〔用例23〕の否定形で、『大系』には、「まさかそんな事はあるまいと思われまいからでしょうか」、『全集』には、「まさかそんなことはあるまいと、いちがいに否定してお思いになるわけにはいかないからであろうか」とある。これは『基礎日本語辞典』に指摘された「まさか……とは思うまい」を想起するが、ここでの否定語は「まし」であること、これまでの「よも」

の用法とは、大きく異なる。また、ここでは文末否定語で文が終止せず、後に続く用法となつてゐる。

〔用例25〕は、中の君を但馬守の娘と信じた中納言は、自らも宮の中將を装い、お互いに誤認したまま別れる場面であるが、全集には「父上の但馬守には決して文句は言わせないつもりです。」とある。この「さりとも、よも……じ」形は、〔用例1〕〔用例19〕と同一で、「当人の意志的な行為」を表している用法である。

〔用例26〕『大系』頭注には、「ほんとうに、中君の方から進んでしたことは、まさかありますまいが、熱心に一所懸命言い寄る人があるからだろう」と推測すると、とある。ここでは「げに……よも……じ」形をとり、副詞句が「よも」句を修飾する〔用例12〕「さらに、よも……じ」形と同質のものである、と考えられるが、この『大系』本文では「よも侍らじを」で文が終止してゐない、とする。

〔用例27〕大納言ちかく入れ奉りて、出家の本意遂ぐるよしを申給て、「身に、ことに思ひなやむことも侍らず。こどもとて侍れど、男どもは、「宿世にまかせてあれ」

と、もとより思ひはなちたれば、心やすく侍り。殿に奉りて侍る人は、けふまで、かくとき／＼おはしますめれば、「さりとも、よも、むげに思しすてさせ給はずや」と、ふかく頼み侍り。「夜の寢覚」巻二134頁・170頁

〔用例28〕「大殿も、かく聞き給ひては、『子ある宿世こそ』とて、いかばかりか、もてさわぎ給はまし。あながちに、『あしきこと』とも、よも制する人もあるまじけれど、げにたゞ見そめしありさま、ゆくりなく、あはつけきやうなれば、そのもとの心をしのびつゝ、女方の、いみじく怖ぢはゞかり給てあとを絶つに、(略)」と思しつゞけて、(略)「夜の寢覚」巻二161頁・211頁

〔用例27〕は、「さりとも」と「よも」が共起した例で、姫君達の父である太政大臣が大納言に対面して中の君の後件を依頼する場面の一節である。『大系』頭注には、「あなたに差上げてあります(大君)は、(あなたが)こうして今日まで時々おこし下さるので、「いくら何でも、よもやむげにお捨てにはなるまい」と、深くお頼み申しています」と指摘し、『全集』は「まかり間違つても、

まさか、全くお見捨てになることもあるまいと、心から頼みにしております。」とあり、「さりとも、よも…否定形」で、一見するとこれまでの用法と大差ないように感じられる。しかし、ここでは「よも」の修飾句が、これまでの「じ」ではなく、「ずや」となっている点、平安中期までの用法と大きく異なっている。また、ここでは、父太政大臣の大納言に対する気持ちであり、これまでの「用例1」「用例19」「用例25」「当人の意志的な行為」というよりは、「状況に対する判断」する用法であり、「否定的予測」を表す副詞「用法ではない。

〔用例28〕は、「…とも、よも…否定語」で、形態は、これまでの「さりとも、よも…じ」形と同じで、『全集』には「そうなれば、私たちの仲を、あえて、悪いことだとも、咎め立てする人もまさかいまいが」とある。しかし、これも「用例24」同様、「よも」の修飾句が「じ」ではなく、「まじ」で、しかも被修飾句が、接続助詞「ど」と承接し、文が終止せず、後に続く用例で、中期までの用法とは異なっているのである。

このように平安時代後期成立と考えられる「大鏡」「夜

の寝覚」では、「よも」の呼応語は「じ」以外に、「まじ」や「ずや」との共起する用例が存し、これまでの中期までとの用法とは異なっており、用法の変容を窺い知ることができるのである。

ここで、平安時代を中心に「よも」の修飾句を表に示すと次のようになる(表Ⅱ)下頁)。(表Ⅱ)より、後期作品においても、「よも」の被修飾句は、キリシタ資料等に指摘されているような、様々なバリエーションを急速に取らず、他の作品においては、平安時代初期にみられる「よも・・・じ」形に限られると考えられる。そういった意味で、「大鏡」や「夜の寝覚」の用例は、「よも」の用法が、まさに変容する、或いは変容しつつある姿を映していると考えられ、注目されるのである。

〔用例29〕(略)「おのれ、もし命ありて帰りのぼりたらば、その時にかへし得させ給へ。のぼらざらむかぎりは、かくて給へ。もし又命絶えてなくもなりなば、やがてわが家にし給へ。子も侍らねば、とかくいふ人もよもはべらじ」といひて、預けてやがて往にければ、そのいへ

<表Ⅱ>

作品名	成立年代	用例数	じ	よもと	よもなど	まじ	まじい	まい	う	備考
万葉集	(759)	0								
東大寺講誦文稿	(830?)	0								
竹取物語	(859?)	1	1							「よもあらじ」
古今和歌集	(905)	0								
延喜式祝詞	(905-927)	0								
伊勢物語	(900?)	0								
土左日記	(935)	0								
後撰和歌集	(951)	0								
大和物語	(956)	0								
蜻蛉日記	(974)	1								異文「よも-かかる」1例
宇津保物語	(983?)	8	6							じや1
三宝絵詞	(984)	0								
落窪物語	(988)	15	14	1						全「よも・・・じ」(「よもと」1例底本ゆれあり)
拾遺和歌集	(1000)	0								
枕草子	(1002)	4	3	1						よも・・・とさらに・・・じ
和泉式部日記	(1004)	4	2	2						歌語1「じ・かし」1
源氏物語	(1008)	24	23		1					じかし1・じよ1
紫式部日記	(1008)	0								
堀中納言物語	(1005)	2	2							
更級日記	(1060)	0								
栄花物語	(1060)	5	4	1						
大鏡	(1086)	3	1	2						
夜の寝覚	11世紀後半?	17	12	3		1				ざりともよも・・・ずや/よも・・・まじけれど
法華百座聞書抄	(1110)	0								
古本説話集	(1126~1201)	2	2							
佛教説話集	(1140)	0								
詞歌和歌集	(1151)	0								
梁塵秘抄	(1169)	0								
三教指帰注	院政後期	0								
宝物集	(1178)	1	1							されども・・・よも・・・じ
千載和歌集	(1188)	2	1							867・1195/左注913(よもあらじ)
宇治拾遺物語	(1210頃)	15	14	1						
徒然草	(1330頃)	3	3							
遊仙窟	(1344)	0								
湯山瞬句抄	(1504)	0								
中華若木詩抄	(1534?)	0								
天草版平家物語	(1592)	15	7				4	2	2	
天草版伊曾保物語	(1593)	1								「さだめて・・・よも・・・じ」
天正狂言本	(1578?)	0								
大藏虎明本狂言集	(1642)	3	3							全「よも・・・じ」
きのふはけふの物語	(1624)笑話	0								
計		126	99	11	1	1	4	2	2	

は得たりける。

〔古本説話集〕 卷下 第58 99才 197頁

〔用例30〕 サレトモ佛ノ御前ニテハヨモソラコトハノタ
マヒ侍(ラ)シトオモヘハ申(シ)侍(ル)ナリ

〔宝物集〕 七才8 93頁

〔用例31〕 女を語らひ侍けるを、いかにもあるまじきこ
となり、思ひ絶えねといひ侍りければよめる 安性法師

俗名時元

つらしとてさてはよも我山鳥かしらは白くなる世なりと
も 〔千載和歌集〕 卷十八 雑歌 1198

〔用例29〕は「古本説話集」の用例で、「よも…じ」形
で、平安時代中期までの用法と同質であるが、「用例30」
では、「さりとも」ではなく「されども」と共起してい
る点、また「用例31」では、「あなたの仕打ちがむごい
と言つても、それではと、決して私の恋心は止みはしな
い。たとえ山鳥の頭が白く変つたという故事のようなあ
り得ぬことが起つたとしても。」と解され、「よも」修飾
部は省略されており、ここでは和歌中の用法であるとい

う音数律の制限も関係していようが、これまでのよう
に「と」が承接することなく、省略されている、といった、
中期とは質的に変容した形式が後期には見られるよう
になる。これらのこともやはり質的に変容しつつある「姿」
を反映している、と考えるべきであろう。

四、おわりに

「よも」は、平安時代においては、会話文、心話文とい
つた引用句中に用いられ、平安時代初・中期においては、「よ
も」の呼応する表現形式は、「じ」と呼応し文が終止する、
或いは「よもと」によって、省略されることが明示化さ
れる、といった、非常に安定した形式であるのに対して、
後期になると、「よも」の被修飾句で文が終止しない「よ
も…ずや」形や「よも…まじ」形等の呼応例が見られ
るようになり、質的変容を見せる。

助動詞「じ」「まじ」との意味的関連や、中世以後の「よ

(注2) ロドリゲス「日本大文典」には、「まい」以外にも、平安時代と同じように、「じ」と呼応した例が挙がっている。また、「天草版伊曾保物語」では、「さだめて」等副詞句と共に起している。

・弓取は名こそ惜しけれ、人は一代、名は末代ぞ。名に附いた傷は末代まではよも(yomo)失せじ。(「八島」)

・武蔵坊なればとて鬼神にてもよもあらし。(「昌尊の舞」)

・救けたう思へども、汝よも二君には仕へじ。(同前)

・その後かの狼にパストル行き逢うて、「さても先度は危うい命を我が調略を以て助けたれば、定めてその恩をばよも(yomo)思い忘れじ」と言えば、狼答えて言うは、「仰せの如く御身の舌の先は忝なけれども、眼は抜いて取りたいぞ」と。

(「天草版伊曾保物語」パストルと狼の事 465-2)

(注3)「よも死なじものを」で文が終止するとする『大系』本文と、後に続くとする『全集』『新大系』本文があるが、ここでは、保留する。

(注4)『大系』補注参照。

(参考文献)

・山口堯二(二九八〇)『古代接続法の研究』(明治書院)

・——(二九九六)『日本語接続法史論』(清文堂出版)

版)

・森脇茂秀(一九九九)「終助辞「かし」をめぐって—

中世後期を中心に—」(「山口国文」22)

・——(二〇〇二)「逆接仮定表現の一形式—「さり

りとて」「さりととも」を中心に—」(「京都語文」九

佛敎大学国語国文学会)